

内、最も早くまず手持ちの十万ドルを支援した。一番先に国際支援に働いてきた日本カリタスと近い関係にあり、今度は世界中のカリタスがその支援に熱心になった。入ってきた資金はその年に全部使うルールで資金が足りないという感覚はないという。カトリックの宗教間対話を担当する宗教間一致委員会のY国際委員会ディレクターは、韓国の宗教間対話の二つの協議体は七宗教が平等に一票をもち、信者数や支援金で左右されていない。純粹に人道的な支援に於いては、政治的な理念から離れることで、それほど違いなく諸宗教は一致でき、「隣の宗教」として、祈りを共にできると語る。

韓国仏教の曹溪宗福祉財団のC事務局長は、日本は仏教国というイメージがあり、仏教信者も多く、自分たちが被害を受けたような気がしたという。休日の土日にも出勤して情報を収集し、月曜に住職に報告、一番早い先発隊を出すという指示を受けた。仏教界として素早い対応をすることで、伝道目的などの心理的負担をかけず支援ができると義務感を感じ、現地入りを最優先した。航空券の確保が困難であったが、三月十五日に支援に入り二〇日に帰国した。日本の仏教界と共に支援をした方がいいと考え、一緒に追善供養の儀式をしようということも決めた。目前にした現場では、亡くなった方々が苦しみから逃れ、極楽往生できるよう願って祈禱した。仏教TV放送も随時放送しており、韓国の仏教信者も仏像が倒れる等被害状況をその都度知ったため災害支援、募金に極めて積極的である。

以上、日本の大災害に際し、救援・支援という共通の目的に、隣国・韓国において複数の宗教性が独自の文脈から各々鋭

敏に反応し、行動がなされたことが汲み取れるのである。

災害と救済論理

米井輝圭

二〇一一年の東日本大震災は、宗教を含めた社会の各方面に深刻な問題を突きつけるものもあった。ローマ法王ベネディクト十六世は、震災を経験した少女からの公開質問で、「どうして日本の子どもは怖くて悲しい思いをしなければならぬの」と問われて、「私も自問しており、答えはないかもしれない」と応じている。このことは、このような大規模な災害にあたって、宗教がいまや説明し納得させる言葉を容易に持ち得ないことを示している。

大災害の原因については、かつては災因論として宗教が説明に当たり、またそこから人々の救済を担当していた。苦難の神義論は、そこにおいて重要な役割を果たしていたが、現代においては「神による試練」などの言い方では明らかに時代に合わなくなってきたといえよう。

今回の大地震は千年に一回の規模といわれるが、前回は大正十一年(八六九)であったことが、文献史料と地質調査から判明している。その状況は今年の震災にまさるとも劣らぬものであった。津波による溺死者が千人にものぼったとされている。この時はすみやかに中央政府に報告がなされ、詔で天皇の不徳の結果であると表明され、あわせて死者の収容埋葬や食料等の

支給、そして税の減免などが指示された。そしてこの時代のあり方としては、さらに為政者によって宗教的な対処も行われるのが通例であった。

推古天皇七年(五九九)の地震では、「四方」に命じて「地震神」を祭らせている。天平六年(七三四)の大地震では、「政事に欠があつた」ことを警告するために山陵が動じたことが原因とみなされ、諸官の引き締めを命じた。嵯峨天皇の弘仁九年(八一八)の関東地方の震災でも、同様の詔が出された中で、卜筮の結果として神霊の咎祟があつたことを認め、諸国分寺において金剛般若経を転読することが命じられている。

この時代では、災害を神霊のしわざと規定し、神祇官や陰陽寮の卜占によっていかなる神霊のしわざかを特定し、そのうえで神霊への対処や死者への読経を行うことになっていた。災因の説明は超自然的に説明され、またその対処の方も宗教的な営みが核にあつたわけである。そして古代における救済は、共同体の存続を脅かす要因の除去を中心としていたので、ここでは災因論と宗教的な救済とは一体となつて社会的に機能していた。宗教的な要素抜きでは災害への対応が完結しないし、また救済の論理や方法論も自然とそこに組み込まれていたわけである。私はかつてこのような体制を「崇りのシステム」と名付けたことがある。災害のたびに卜占で神霊的な原因を特定し、必要な宗教的対処を行うことで、社会が平穏を取り戻す形を作り、また社会的な不安心理を取り除くことが継続的に朝廷によって行われてきたのである。これは古代日本的一種の神義論をも含んでおり、ある時代までは特に有効に機能したシステム

であつた。

しかしこれはもちろん現代社会では適用できないものである。今日における救済対象は、共同体そのものではなく、その中に生きる個々人でなければならない。ゆえに現代の宗教は個人の悩みを解決するという方向性が強く、また現世利益的でもある。こうしたあり方のもとでは、大災害時に苦難の神義論自体を主張することが、ある種の違和感をもたれることになる。日常的な宗教活動において各個人の内面的な救いを説いているのであれば、災害に対しては普段の布教とはまったく別のスタンスも必要となつてこよう。

いかにしていま一度、宗教が災害に際して説得力のある救済論理を打ち出せるかが、今まさに課題として浮かび上がっているのである。

カトリックの宗教儀礼のもつ社会的役割

——初聖体の事例をもとに——

岡 光 信 子

本発表では、南インドのコータ教区マイラコードウ小教区の事例を取り上げる。カトリック教会の宗教儀礼である初聖体に関わる準備、挙行、祝賀までの一連の過程を精査して、宗教共同体の役割と祝賀行事の社会的意義を明らかにし、宗教儀礼の遂行に伴う宗教性と世俗性の問題について考察することにある。カトリック教会では、信仰に照らされた正しい理性に基づく行動を導く霊的な習性・資質を「徳」と呼んでいる。徳の中で